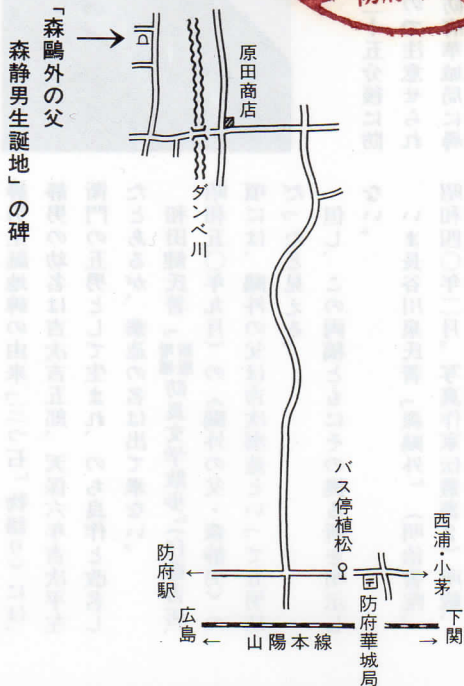


防府華城郵便局風景印



森鷗外の父 森静男生誕地の碑



夏目漱石と並び称される明治の文豪森鷗外の父、森静男の出身地は周防国佐波郡植松村で、今の山口県防府市植松小松原と呼ばれる所である。平民吉次^{きちじ}勲右衛門の次男(注)として天保七年(一八三六)六月四日に生まれ、名前を泰造といった。吉次家は太庄屋の家柄であった。次男の泰造は家を離れ、石見国津



和野の亀井侯の御典医森家に医学修業に入門し、その温厚な人物と蘭法医としてのすぐれた腕前を見込まれて、文久元年(一八六一)二十六歳の時、当時十六歳のミ子の婿養子に迎えられた。入籍後名前を静泰^{せいざい}と改め、明治維新後に静男と名乗るようになった。長男林太郎^{たけう}(後の森鷗外)が生まれたのは、翌文久二年一月十九日のことであった。

「森鷗外の父 森静男生誕地」の記念碑は、昭和三十二年四月、水田と化した昔の家屋敷の一隅に建設されたが、二十五年の風雪に損壊甚だしく、昭和五十六年十一月一日に再建された。

山陽本線防府駅前より華城^{はなぎ}經由の小茅^{こがや}行きバスで約十五分(二〇〇円)、バス停植松^{うゑまき}で下車して徒歩約八分のところに記念碑が建て



静男生誕地碑の由来「三つ石」物語り」には、静男の幼名は吉次吉五郎、天保六年吉次平左衛門の五男として生まれ、のち良作と改名したとあるが、泰造の名は出て来ない。

和田健氏著『増補 新版 防長文学散歩』(白藤書店、昭和五〇年九月)の「鷗外の父・森静男」の項には、鷗外の父は吉次泰造と云って五男坊だったと見える。

但し、この両稿ともにその拠る所を明示しない。

いま長谷川泉氏著『森鷗外』(明治書院、昭和四〇年二月)写真作家伝叢書2)所載、津和野町の除籍簿の森家の記載に、「実父周

られている。下車したバスは二十五分後に防府駅行きとなって帰って来るので注意せられたい。なお、道順不審の際は防府華城局に尋ねれば教えてくれる筈である。

【注】

『ほうふ日報』第三五四一号(昭和五二年二月二七日)所載、矢島次郎氏稿「鷗外の父

養父玄仙亡 森静男 天保七年六月四日生」と見えるのに従った。